

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 王 恩美
論文題目 東アジア現代史のなかの韓国華僑——冷戦体制と「祖国」意識
論文審査委員 松永 正義教授、イ・ヨンスク教授、安田 敏朗准教授

1 本論文の構成

王恩美氏の博士学位請求論文『東アジア現代史のなかの韓国華僑——冷戦体制と「祖国」意識』は、日本時代以来現在に至るまでの韓国華僑のアイデンティティーのありかたと、そのよってきたる社会組織のありようを、歴史的に叙述したものである。

本論文は以下の各章から構成される。

序章

第一章 1945年以前における華僑社会

- 第一節 朝鮮半島への移住（1882年～1894年）
- 第二節 単身出稼ぎの華僑社会（1895年～1910年代）
- 第三節 定住型の華僑社会へ（1920年代～1945年）
- 第四節 1945年以前における華僑社会の特徴と「中国人」意識

第二章 東アジアの冷戦体制の形成と国家の分裂

- 第一節 朝鮮半島の分断
- 第二節 中華民国政府による統合と韓国華僑の合流
- 第三節 朝鮮戦争と韓国華僑
- 第四節 東アジアにおける冷戦体制と韓国華僑の「祖国」意識

第三章 韓国の制度的差別と韓国華僑

- 第一節 排他的制度のはじまり
- 第二節 強まる法的規制と排除
- 第三節 華僑の生きる道
- 第四節 韓国人と華僑の境界線及び韓国華僑の「祖国」意識

第四章 中華民国と韓国華僑の相互関係

- 第一節 中華民国政府の対韓国華僑政策
- 第二節 韓国華僑にとって中華民国との関係がもつ意味
- 第三節 中華民国の政治動員と韓国華僑の積極的な呼応
- 第四節 中華民国の国民意識の強化と「祖国」意識

第五章 韓国・中華民国の反共共同体と韓国華僑

- 第一節 韓国における反共体制と反共生活
- 第二節 中華民国の反共体制と反共イデオロギーの内面化
- 第三節 韓国・中華民国の反共外交と韓国華僑
- 第四節 「反共価値観」と「祖国」意識

第六章 韓国華僑の抱く「祖国」と「祖国」意識の崩壊

- 第一節 韓国華僑の抱く「祖国」としての中華民国のイメージ
- 第二節 「祖国」に対する強い「愛国」感情
- 第三節 韓国華僑の支持基盤
- 第四節 韓国華僑の「祖国」意識の崩壊
- 終章 結論
- 附章 2000年以後の韓国華僑社会の変化
 - 第一節 韓国社会の差別構造の改善と残された課題
 - 第二節 中華人民共和国派の誕生と中華民国の求心力の急速な低下
 - 第三節 韓国華僑のアイデンティティの変化
- 参考文献
- 付録：羅亜通氏へのアンケート調査

2 本論文の概要

本論文は韓国華僑という、世界の華僑集団のなかでも特異な存在のありかたを詳細に跡づけたものである。韓国華僑の特異性は、韓国という反共国家のなかにあることによって、戦後の中国の分裂のなかで中華民国を選ぶことしかできなかったこと、しかしながら韓国華僑の出身地は大部分が山東省で、台湾という土地とは関係が薄く、いわば故郷ではなく「祖国」として台湾に存在する中華民国を選ぶことになったこと、したがって冷戦体制崩壊後「中華民国」が「台湾化」するにしたがって韓国華僑のアイデンティティに変化が生じていること、などに求められる。本論文はこうした韓国華僑のありかたと問題性をその「祖国」意識を中心に分析し、歴史的に跡づけようとするものである。

序章ではこれまでの研究史の総括のなかで、以上のような問題意識が明らかにされる。

第一章では、日本植民地時代の韓国華僑の状況が述べられる。華僑社会は朝鮮人とは区別された社会であったことによって、そこに「中国人」意識が形成されたが、それは政治化されたものではなく漠然とした故郷意識にとどまるものだった。

第二章では、東アジアの冷戦体制の形成と朝鮮戦争のなかで、韓国華僑が中華民国の下に再編成される過程を叙述する。韓国華僑は戦後の韓国の政治体制のなかでは中華民国以外の選択肢はあり得なかつただろうが、しかしまた朝鮮戦争に際して、直接、間接に中華人民共和国を敵として戦ったことが、韓国華僑に中華民国を「祖国」として選ばせる決定的な要因となったことが指摘される。

第三章では、国籍法、出入国管理法などの韓国の排他的法制度や、華僑経済の拡張を警戒し、それを抑止しようとする経済政策が、韓国華僑に保護者としての中華民国の重要性を認識させ、これに対する「祖国」意識を強固にしていたことが論じられる。

第四章では、中華人民共和国に対する正当性の証として華僑社会の支持を必要とする国民政府と、疎外、抑圧された韓国社会内部での保護を求める華僑社会の要求によって、中華民国政府の韓国華僑に対する統制力が強まっていったこと、また自治区組織という他の華僑社会には類例の

ない組織が、事実上大使館業務の末端を担う行政組織となっており、これを通じて華僑社会の統制が行われていったことが指摘される。

第五章では、韓国、中華民国の反共体制が、華僑社会にも深く浸透していたことが分析される。この反共意識は「祖国」中華民国だけでなく、また韓国の体制でもあり、著者のいう「反共価値観」によって韓国華僑は韓国社会への連帯感を持つことができた。

第六章では、台湾の民主化＝台湾化のなかで、韓国華僑が一貫して「祖国」たる中華民国を支持していたのは、「中国全土を支配する中華民国」というイメージと、これを支える国家体制によってであったこと、また海外華僑の参政権がこうした国家体制への帰属意識を強めていたことが論じられる。しかしながら台湾における国家体制の台湾化が進展するにともない、こうした「祖国」意識も崩壊せざるをえず、2000年の陳水扁政権の成立が、こうした「祖国」意識崩壊を決定づけたことが分析される。

附章では、2000年後、中華民国への求心力の低下により、韓国華僑内部に中華人民共和国派が形成されるなど、現在の華僑社会の変容が論じられる。また韓国社会の変化のなかで、韓国への親近感が増していることも指摘される。

3 本論文の成果と問題点

本論文は、これまでほとんど研究のなかった韓国華僑社会についての、初めての体系的叙述とあってよく、また韓国華僑社会を韓国のみならず東アジアの冷戦体制という広い枠組みのなかでとらえ、その歴史的変遷過程を見事に叙述している。

資料も独自のインタビューや、これまで使われてこなかった台湾の檔案資料などを駆使したことが、本論文のオリジナリティを保証しており、その意味で、朝鮮戦争と韓国華僑社会の関わりを論じた第二章、自治区組織を通しての華僑社会の統制の有様を分析した第四章は、本論文中の白眉とあってよい。

叙述、分析も均整がとれており、本論文の完成度は高い。

しかしながらあえていえば、資料的制約もあって華僑社会がその主体の側からはとらえられておらず、したがってそこにありえたであろう多様性が表現されていないこと、在日朝鮮人社会、他の華僑社会との比較など、よりテーマをふくらませることのできるだろう視点がふくまれていること、などは惜まれる点である。もっとも本論文は完成度は高く、口頭試問でも王氏はこれらの点をよく自覚していることが伺われたので、以上の指摘はむしろ王氏の今後の研究に期待すべき事だろう。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えている。

最終試験結果要旨

2007年2月14日

受験者 王恩美

最終試験委員 松永正義 イ・ヨンスク 安田敏朗

2007年2月5日、学位請求論文提出者王恩美氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『東アジア現代史のなかの韓国華僑——冷戦体制と「祖国」意識』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、王恩美氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、王恩美氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。